

第5章

飲酒文化をめぐって

10 古代インドの儀礼における酒の使用

永ノ尾 信 悟*

古代インドのヴェーダ文献の伝える儀礼では、どろどろしたビールとでもいうべきスラーの使用がよく知られている。家庭で行われる結婚式などの人生儀礼などを記述するグリヒヤストラにおいて、結婚式や祖霊祭、魔的存在にとりつかれた者の祓いの儀礼、村人の協調のための儀礼、農耕儀礼においてスラーの使用が見られる。一方、スラーという語は、本来の意味を維持しつつ、酒一般を指すようにもなり、多くの種類の酒が記述されるようになる。そのような時、酒一般はマドゥヤという語で表現されるようにもなる。1000年期中葉以降の文献群であるプラーナ文献においても、鬼神、魔的存在、さらには恐ろしい女神たちの祓いや礼拝で酒の使用が薦められることがある。他方、儀礼期間中の禁忌のひとつとして禁酒が挙げられるが、この事実は普段の生活における飲酒を暗示するものであろうか。正統バラモンイデオロギーでは禁じられる飲酒も、現在と同じく昔のインドにおいても行われていたと思われる。

キーワード：古代インド、儀礼、ヴェーダ文献、プラーナ文献

1. ヴェーダ祭式におけるスラーの使用
2. ヴェーダ文献に見られるスラーの評価
3. グリヒヤストラおよび補遺文献におけるスラーの使用
4. プラーナ文献における酒の使用
5. プラーナ文献の儀礼における飲酒の忌避
6. むすび

* 東京大学東洋文化研究所教授

1. ヴェーダ祭式におけるスラーの使用

古代インドのヴェーダ文献が伝えるいくつかの儀礼においてスラーと呼ばれる酒が用いられた。スラーは大麦などのでんぷんを麦芽などによって糖化し、その後空気中の菌によって発酵が行われて作られたもので、古代インドのビールと呼んでよいと思われる¹⁾。この古代インドのビールともいべきスラーはヴァージャペーヤおよびサウトラーマニーとよばれるヴェーダ祭式において使用されていたことが最もよく知られている [Kolhatkar 1999; Kane 1974a: 1207, 1224-1226]。しかし、その際、実際に飲むのか飲まないのかが問題になる場合があった。例えばアーパスタンバ・シュラウターストラ (19.3.3-5) によると、スラーを飲むバラモンをお金を払って雇う場合と、祭主自身が飲む場合、それに、飲まずにあり塚に流してしまう場合の3つの選択肢を伝えている [Caland 1928: 169-170]。

アイタレーヤ・ブラーフマナ 8巻5章から23章において王の2種類の灌頂儀礼が伝えられている。第一の灌頂儀礼の冒頭で、アイタレーヤ・ブラーフマナ 8巻5章3節²⁾ は灌頂に用いる水の中に入れるべき8つのものを列挙するが、そのひとつにスラーがある [Keith 1920: 322]。

アイタレーヤ・ブラーフマナ (8.8.8-14) においては、第一の灌頂儀礼を終えた王がスラーを飲む儀礼が伝えられている。その際、王はサウトラーマニーで用いられるのと同じマントラを唱えてスラーを飲む。一部分を飲んだあと、残りを好意を持つ者に与えるとある。それにより友情、同盟が築かれ、王権が安泰になるという解釈が与

1) スラーの作り方に関しては永ノ尾 [1995] を見られたい。さらに Kolhatkar [1999: 117-135] は第8章「スラーの準備」という章名のもとサウトラーマニーというヴェーダ祭式におけるスラーの作り方を、マントラなどの儀礼要素とともに記述している。永ノ尾 [1995] において言及されなかったスラーの作り方を記述するシュラウターストラに以下のものがある。マーナヴァ・シュラウターストラ (5.2.4.2-6; 5.2.11.3-5)、ヴァーラーハ・シュラウターストラ (3.2.7.2-6)、アーパスタンバ・シュラウターストラ (19.1.1-10)、ヒラニャケシ・シュラウターストラ (13.8.1-8; 23.1.6-14)、ヴァイカーナサ・シュラウターストラ (11.1 [122, 3-11])、さらに Weber [1868: 349-350]、Macdonell and Keith [1912: 458-459]、Hillebrandt [1927: 481-491]、Kane [1974a: 1224-1226] を参照。インドの文献の引用の仕方に関しては注2を参照されたい。

2) 以下においていくつかの文献に、その引用箇所を指定しながら言及していくが、例えばこの「アイタレーヤ・ブラーフマナ 8巻5章3節」を「アイタレーヤ・ブラーフマナ (8.5.3)」という形で言及していくことにする。次ぎの段落の冒頭に「アイタレーヤ・ブラーフマナ (8.8.8-14)」があるが、これは「アイタレーヤ・ブラーフマナ 8巻8章8節から14節」を意味する。また、「カータカ・サンヒター (12.11 [173, 21-174, 1])」といった表示をすることもあるが、カータカ・サンヒター 12巻11章で校訂本の173ページの21行から174ページの1行までであることを示す。このような表示の文献では章が細分されていないため、引用箇所を明示するためにページ数と行数を指示することにする。

えられている [Hillebrandt 1897: 147; Keith 1920: 325]。またアイタレーヤ・ブラーフマナ (8.20.3-4) はスラーを飲む儀礼のみを繰り返して記述している。

サウトラーマニーにおいてスラーが飲まれた直後に、祭場の南の部分にあるダクシナ・アグニといわれる祭火の上に、100個の穴のあいた壺がつるされ、その穴からしたたり落ちるスラーが祭主の祖先の霊に捧げられた [Caland 1928: 170; Kane 1974a: 1226]。このように、スラーの使用が散見されるが、サウトラーマニーの際に、スラーを飲むか飲まないかの選択肢が与えられていたように、スラーの飲酒に関して何らかの距離をおいていたことが感じられる。以下に、ヴェーダ文献が伝えるスラーに関するいくつかの見解を紹介してみる。

2. ヴェーダ文献に見られるスラーの評価

リグ・ヴェーダ (7.86) は恐ろしい司法の神ヴァルナに罰せられた詩人ヴァシシュタがヴァルナに許しを請う賛歌であるが、その第6の詩節の前半で「ヴァルナよ、それは自分自身の巧みな違反ではない。それはスラー、怒り、賽の目、無思慮」と語り、スラーによる酩酊を神の怒りをかったひとつの原因としてあげている。

ヴェーダ祭式を解釈するブラーフマナ文献は、その議論においてしばしば「等置」という手段を用いる [永ノ尾 1989: 38-44]。祭式儀礼に用いられるいろいろなものが、観念世界の構成要素と直接的に結びつけられる。そのような等置の場合、スラーは例えばカータカ・サンヒター (12.11 [173, 21-174, 1]) とマイトラーヤニー・サンヒター (2.4.2 [39, 4]) では虚偽 (anṛta) と、またシャタパタ・ブラーフマナ (5.1.5.28) では虚偽 (anṛta)、罪 (pāpa)、闇 (tamas) と等しいものとみなされていた。また、同じカータカ・サンヒター (14.6 [205, 13]) ではスラーは「食べ物の滓 (śamala)」とみなされていた。

ブラーフマナ文献が語るスラーの発生に関するエピソードにもスラーへの否定的な評価を反映したものがある。スラーを虚偽と等置したカータカ・サンヒター (12.12 [174, 14-17]) とマイトラーヤニー・サンヒター (2.4.2 [39, 15-18]) は「造物主の愚かさ (mālvya) が後方に取り除かれてスラーとなり、そのスラーから王族 (rājanya) が創造された」と短く語る。タイッティリーヤ・ブラーフマナ (1.3.2.6) によると食べ物の滓がスラーとなったとされ、同じくそのブラーフマナは別の箇所 (1.8.5.2) で、インドラ神がソーマを搾ろうとした時、彼の勇気 (vīrya) が10に分かれて落ちてしまった。例えば鼻から落ちて行った勇気はライオンになり、両目からののはトラに、両

耳からはオオカミになったといわれ、上のほうへ上った勇氣は神々の飲み物ソーマになったが、下へと落ちたものがスラーとなったという。これに類似した話をシャタパタ・ブラーフマナ (12.7.1.7) は語る。インドラに息子を殺されたトヴァシュトリはインドラを呪うためソーマを準備するが、インドラはむりやりそのソーマを奪い飲む。そこでインドラの英雄心 (indriya) と勇氣は怒り (bhāma) となり臀部から流れ出て、それがスラーとなった。

ジャイミニヤ・ブラーフマナ (3.382-383) ではいろいろな神をはじめとする存在が造物主を探し、いろいろな形をするものとみなすという神話が語られる。その神話で、最後のエピソードとして、魔族アスラたちのことが語られ、彼らは造物主を探し、スラーの形をそれとみなしたために、その結果滅びたといわれる。

このようにヴェーダ祭式を解釈するブラーフマナ文献はスラーに対して否定的な評価を与えているが、常に否定的な評価のみを与えてばかりいたのではないようである。例えばスラーを虚偽とみなしたカータカ・サンヒターはその同じ文脈で、つまり (12.11 [173, 10]) で「祭式に適う食べ物 (medhyāna)」とみなし、また食べ物の滓と等置した直前でカータカ・サンヒター (14.6 [205, 11]) は「人間たちの最高の食べ物」と評価する。王の灌頂儀礼を記述し、解釈するアイタレーヤ・ブラーフマナ (8.8.5) やシャタパタ・ブラーフマナ (12.7.1.7) はスラーを「食べ物のエッセンス」とみなす。ヴェーダ時代のスラーは古代インドのビールといえるとしても、もちろん現代のビールのようにろ過されていたわけではなく、大麦の糖化した残りや麦芽、煎った穀物の残りなどの残滓がどろどろとしたペースト状をなしていたものと考えられ、そのためにスラーは「食べ物の滓」とみなされてのであろう。しかし、例えばタイッティリーヤ・サンヒター (6.2.10.3) では大麦自身が「滋養」であるとされ、その大麦からなるどろどろした液体は「最高の食べ物」、「食べ物のエッセンス」でもありえたのであろう。アイタレーヤ・ブラーフマナ (8.8.5) は同じ文脈でスラーを「クシャトリヤ階層の現れ (kṣatrarūpa)」とみなし、またシャタパタ・ブラーフマナ (12.7.3.14) は「名声 (yaśas)」とスラーを等値する。

ヴェーダ祭式解釈文献のスラーに対する評価は基本的には否定的であるが、食べ物のすばらしいものとして、また、クシャトリヤ階層とのつながりを示唆する評価も見取ることができる。灌頂の儀礼を終えた王はスラーを飲み、同盟関係を強化するのに用いた。また、次章で紹介するように、結婚式ではめでたい女性達が飲み踊った。スラーは多分しばしば飲まれていたのではないだろうか。そして、スラーの飲酒の禁止は、基本的にバラモンたちにたいして要請され、他のひとびとには許容されていた

ようである。そのような事情を示すブラーフマナ文献の議論がある。マイトラーヤニー・サンヒター (2.4.2 [39,18-40,3]) は次ぎのように語る。「それゆえ、年寄りも若者も、息子の嫁も舅も、スラーを飲んでしゃべりながら（一緒に）すわっている。なぜならそれは愚かさだから。愚かさは罪である。それゆえ、バラモンはスラーを飲むべきではない、『私は自分を罪と交わらせない』と考えて。そして、この解釈を王族に言う必要はない。このように知り、スラーを飲むものを損なうことはない³⁾」。この議論はサウトラーマニーにおいてスラーを飲んでもよいのかという文脈で語られ、スラーは愚かさであり、バラモンは普段は飲むべきでないと知っておれば、祭式儀礼の時にスラーを飲んでも障りはないと論じ、明確に「バラモンはスラーを飲むべきでない」と明言する一方、王族たちには言う必要はない、つまり、彼らにスラー飲酒の禁止を適用する必要はないといっている。

また、バラモンのスラー飲みを非難する言説としてマハーバーラタ (1.71.54) の以下の詩節は研究者によりよく引用されている。「今日以降、どんなバラモンでも、誤ってスラーを飲むものは愚かである。法に違反したバラモン殺しとしてこの世で、またあの世で非難されるであろう」[Mitra 1881: 391-392; Hopkins 1889: 65; Kane 1946: 966; Aalto 1963: 32; 上村 2002: 292]。スラー飲酒に対する否定的な態度はそののちのインドの法典文献の基本的な態度となる。この点はアールトによって詳論されているので [Aalto 1963]、ここで繰り返す必要はないと思われる⁴⁾。

3. グリヒヤーストラおよび補遺文献におけるスラーの使用

いくつかのグリヒヤーストラは冬至の頃に行われるアシュタカーと呼ばれる儀礼を伝えている。そのアシュタカーのあとでアヌアシュタキヤと呼ばれる祖先崇拜儀礼が行われるが、アーシュヴァラーヤナ・グリヒヤーストラ (2.5.5)、カータカ・グリヒヤーストラ (65.7-8)、パーラスカラ・グリヒヤーストラ (3.3.11) によると女性の祖霊達にスラーが与えられる [Kane 1974a: 794]。

シャーンカーヤナ・グリヒヤーストラ (1.11.5) によると、結婚式の時に、4人ま

3) 対応する議論はカータカ・サンヒター (12.12 [174,17-20]) にもある。P. V. Kane および W. Gampert も禁酒は基本的にバラモンにのみ要請されたという主張の根拠に、この議論に言及している [Kane 1974a: 793, Gampert 1939: 103]。

4) 法典文献のスラー飲酒に対する立場に関しては Kane [1973: 21]、Kane [1974a: 792-799]、Gampert [1939: 103-105] を参照されたい。仏教の飲酒戒を考察する杉本 [1984] はヒンドゥー法典類などの資料をも豊富に使った議論をしている。ジャイナ教の飲酒に関しては Jain [1947: 124-126] があるが、ほかの詳細な論考は浅学にして知らない。

たは8人の、夫が生きている女性達にスラーや食べ物を与えられ、その後、彼女達は踊るという習慣を伝えている [Oldenberg 1886: 32]。

マーナヴァ・グリヒヤーストラ (2.14) はヴィナーヤカという魔的存在に取りつかれた者の特徴と、祓いの儀礼を記述する。第28ーストラは、村や町や市場の四辻で行うバリ・タイプの供物の捧げを述べている。生の肉、料理した肉、生の魚、料理した魚など多くの変わった供物の列挙のなかに「香の飲み物 (gandhapāna)、密の飲み物 (madhupāna)、マイレーヤの飲み物 (maireyapāna)、スラーの飲み物 (surāpāna)」と4種類の飲み物を列挙している [Dresden 162]。このうちスラーの他にマイレーヤは確実に酒の一種である⁵⁾。

カウシカーストラ (11.7-10) は村人の関心を得る儀礼を記述するが、ーストラ9で村人に食事を与えとし、ーストラ10でスラーを飲む者たちにはスラーを与えるという [Caland 1900: 21]。また同じくカウシカーストラ (12.5-9) は親族間の協調を確保する儀礼を描き、水を満たした壺をもって村を回り、村の中央に水を注ぎ出し (ーストラ6)、それと同じことをスラーを満たした壺で行い (ーストラ7)、最後に食べ物、スラー、飲み水を与える (ーストラ9) という [Caland 1900: 23-24]。アイタレーヤ・ブラーフマナにおいて王は灌頂の儀礼の後、スラーを飲み、残りを友情、同盟を築くために友人に与えたが、カウシカーストラの記述する2つの儀礼においても、スラーは同じような機能をはたしていると思える。

リグヴィダーナ (2.68-72) は耕作開始の儀礼を記述する。リグヴェーダ (4.57.4-8) を唱えつつ鋤で耕した後に、インドラ、マルト、パルジャニヤ、バガ、プーシャ、ン、シーターなどの神々を香木のペースト、花輪、果物、煎った大麦 (lāja)、とスラーサヴァ (surāsava) で礼拝すべしという [Bhat 1987: 326]。このスラーサヴァも酒の一種であると思われる⁶⁾。

グリヒヤサングラハパリシシュタ (2.16) はスラーにはガウディー (gauḍī) とパイシュティー (paiṣṭī) とマードウヴィー (mādhvī) の3種類があり、ガウディーは結婚

5) マイレーヤの作り方はアルタシャーストラ (2.25.22-23) [上村 1984: 195] にある [Aalto 1963: 22]。また Rajendralal Mitra はマツヤスークタ・タントラを引用して作り方を紹介している [Mitra 1881: 412]。ヴィナーヤカの祓いの儀礼を記述するヤージュナヴァルキヤ・スメリティ (1.284) はマイレーヤとスラーのかわりに「三種類のスラー」を挙げる [井狩・渡瀬 2002: 64]。この「三種類のスラー」に関しては p.6 と注6,7を見られたい。同じくヴィナーヤカの祓いを記述するヴィシュヌダルモッタラ・ブラーナ (2.105.22b) もヤージュニヤヴァルキヤ・スメリティ同様に「三種類のスラー」に言及する。

6) スラーサヴァは例えば医学書のチャラカサンヒター・総説篇 (27.187) [矢野 1988: 206] およびスシュルタサンヒター・総説篇 (45.187) [大地原 1971: 180] に酒の一種として列挙されている。またマヌ・スメリティ (11.96) [渡瀬 1991: 376] はヤクシャ、ラクシャス、ピシャーチャのものとして、バラモンは飲むべきでないという。

式に使うべく、マードゥヴィーは正しいもので、スラーは最低であるという [Bloomfield 1881: 572]⁷⁾。この3種のスラーの定義はその後多くの法典文献にも引き継がれて行く⁸⁾。これら3種の酒のうちガウディーは粗糖 (guḍa) を原料とするものであり、パイシュティーは穀物の粉 (piṣṭa) から作られたものであることは確実であろう。マードゥヴィーに関しては、マドゥーカ (madhūka 現在の北インドではマフアーと呼ばれる) の木の花から作られたか、蜜 (madhu) を原料とするかに関して見解の相違があるようである [Kane 1946: 965]。グリヒヤサングラハパリシシュタは後半でパイシュティーをスラーと置き換え、最低であると評価を下している。大麦などの穀物を主原料にしたどろどろのビールがスラーであったことを考えると、パイシュティーが元来のスラーを表示していることは確かであろう。いずれにせよ、スラーが元来のスラー以外のアルコール飲料を指すようになったこと、そしてスラー以外にいくつかの種類の酒が知られるようになったことは確かである⁹⁾。そしてこのように多くの種類の酒が知られるようになると、酒の総称としてマドゥヤ (madya 酔えるもの) という語がしばしば用いられるようになる。

4. プラーナ文献における酒の使用

カシュミール地方の縁起と宗教儀礼を記述するニーラマタというプラーナは飲酒に関して興味ある儀礼を2つ伝えている。冬の初め、雪が降ったら新酒を飲み、シュ

7) Gr̥hyasaṃgrahapariśiṣṭa (2.16) gauḍī paīṣṭī ca mādhvī ca vijñeyāḥ trividhāḥ surāḥ/pāṇikarmaṇi gauḍī syāt satyā mādhy adhamā surā / 16/

8) Kane [1946: 965] はマヌ・スムリティ (11.95) [渡瀬 1991: 376]、ヴィシュヌ・スムリティ (22.82) [Jolly 1880: 95]、サンヴァルタ・スムリティ (117) に言及する。また Kane [1973: 97] はヤージュニヤヴァルキヤ・スムリティ (3.254) への注釈ミタークシャラが引用するプリハスパティ・スムリティに言及する。ミーマーンサーストラ (1.3.7) へのタントラヴァールツティカもマヌ・スムリティ (11.95) にほぼ対応する文を引用している。アーシュヴァラーヤナ・グリヒヤーストラ (2.5.5) への注釈やプリハンナーラディーヤ・プラーナ (28.25) にも同様な3種類のスラーの列挙があり、インド古典文献においてはよく知られていた列挙のようである。

9) さまざまな酒を列挙するものに、例えば以下のものがある。チャラカサンヒター・総説篇 (25.48-51) [矢野 1988: 172-173]、チャラカサンヒター・総説篇 (27.178-195) [矢野 1988: 205-206]、スシュルタサンヒター・総説篇 (45.170-216) [大地原 1971: 178-182]、アルタシャーシュトラ (2.25.16-25) [上村 1984: 194-195]。ヴィシュヌ・スムリティ (22.83) はマフアー酒 (madhūka)、サトウキビ酒 (aikṣava)、みかん酒 (tāṇka)、なつめ酒 (kaula)、ナツメヤシ酒 (khārjūra)、ジャックフルーツ酒 (pānasa)、おどろ酒 (mr̥dvīkarasa)、密酒 (mādhy karasa)、マイレーヤ、ココヤシ酒 (nārikelaja) の10種の酒を列挙している [Jolly 1880: 95-96; Gampert 1939: 104; Kane 1946: 965]。これに類似の列挙がアグニ・プラーナ (173.21cd-22ab)、プリハンナーラディーヤ・プラーナ (28.32) およびマヌ・スムリティ (11.95) に対する注 Manvarthamuktāvalī が引用するプラスティヤにある。

ヤーマー女神を礼拝せよとニーラマタ (465cd-468) は次ぎのように記す。「雪が降ったら酒飲みたちは新しい酒を飲め。膏を塗り、飾りをつけ、十分に着こんで雪の上ですわり、花や香煙やよいにおいの膏、食べ物や果物や根でシュヤーマー女神を礼拝せよ。友達、召使、やって来た親類たちと一緒に心いくまで食事をせよ。歌や演奏を聞け。遊女の踊りを見よ。女達をもてなせ」と。また、春、雪解けのあとイラーという花が咲き出すと、その花と同じ名前のイラー女神の礼拝が行われるが、ニーラマタ (670-671, 673cd-675ab) は次ぎのように記述する。「イラーの花で飾られたイラー女神が生まれた日に、女、子供たちと一緒にイラーヴァータに行って、よい服を着て、膏を塗り、心楽しく、気を静めて、花やほかの供物でイラーの礼拝をせよ。…イラーの花を赤い紐でくくって、自分にかけよ。女達に与えよ。歌や楽器の演奏を聞け。そして踊りを見よ。イラーの花と一緒に酒を飲め」。この2つの祭礼は昔のインドにおいてしばしば言及されるピクニックを思わせる [Mitra 1881: 422-443]。法典文献には地方の習慣として北の方では飲酒が認められていた [Aalto 1963: 27]。この北の地方にカシュミールが含まれているかどうかははっきりしないが、カシュミールと思われる地方の仏教徒が冬の午前中に酒を少し飲むことを許されていたといわれる [榎本 1993: 269]。これらの記述から、カシュミールにおいては飲酒は少なくとも、祭礼の時には、行われていたものと推測される。

6世紀に活躍したヴァラーハミヒラが著した『占術大集成』47章は、月がプシュヤ宿 (puṣya-nakṣatra かに座) に入ったときに行う王の沐浴儀礼であるプシュヤ沐浴を記述している。祭場に作られたマンダラにさまざまな神格を配置したのち、(47.27-28) と (47.30) は「さまざまな色づけをしたあと、賢者は、それぞれを美しく芳香のある香や花環や塗香で礼拝するべきである。さらにまたさまざまな菓子、食物、果物、肉、スラー酒、牛乳、アーサヴァ酒などさまざまなおいしい飲み物で。…悪鬼 (ビシャーチャ)、ディティの子孫、悪魔 (ダーナヴァ) は肉飯と酒によって歓待すべきである」[矢野・杉田 1995: 203] と、悪鬼などを酒で、つまり先に言及されたスラー酒やアーサヴァ酒で礼拝するべきことを教えている。同じくこのプシュヤ沐浴を記述するデーヴィー・プラーナ (65.90-91) と (65.93) は『占術大集成』の上に引用したのとほぼ同一の表現で悪鬼などの酒による礼拝を規定している¹⁰⁾。このプシュヤ沐浴は王のための儀礼であって、そこにおける酒の使用は、アイタレーヤ・プラー

10) このプシュヤ沐浴の儀礼はこれら2つのテキストの他に、アタルヴァヴェーダバリシシュタ5章、カーリカー・プラーナ86章、ヴィシュヌダルモッタラ・プラーナ2巻、103章に記述されているが、これら3つの文献の記述では、酒を用いた悪鬼などの礼拝への言及は見られない。

フマナの記述する王の灌頂儀礼のあとの王のスラーの飲酒を想起させるというより、むしろ、マーナヴァ・グリヒヤーストラが伝える魔的存在であるヴィナーヤカの障りの鎮め儀礼における酒の使用と関連していると思われる。つまり、普通の神々でない、魔的な存在の礼拝に酒が用いられたと一般化して良いように思われる。しかし、一般化するには、いまだし多くの情報が必要であることは当然である。以下に、いくつかの例を集めてみたい。

カールッティカ月の満月の日の半月前の新月の日に、灯明を捧げるディーパーヴァリーと呼ばれる祭礼が行われる [Kane 1974b: 194-210; Gode 1960: 187-260]。そのディーパーヴァリーの祭礼の日に魔族の王バリ (Bali) の礼拝も行われる¹¹⁾。この祭礼を記述するプラーナ文献のなかでパドマ・プラーナ (6.122.50c) とバヴィシシュヤ・プラーナ (4.140.53a) とスカンダ・プラーナ (2.4.10.44a) が魔族の王バリの礼拝の供物のなかに「酒と肉とスラーとなめて食べるもの」という同じ表現で酒の使用を規定している [Kane 1974b: 201; Hospital 1984: 184]¹²⁾。ここでもバリが魔族の王であるゆえに、これら3つの文献は酒や肉の使用を認めたのであろう。

先に、マーナヴァ・グリヒヤーストラ (2.14) はヴィナーヤカという魔的存在に取りつかれた者の祓いの儀礼を記述する。第28ーストラは、村や町や市場の四辻で行うバリ・タイプの供物の捧げを述べている。生の肉、料理した肉、生の魚、料理した魚など多くの供物が用いられると書いた。第29ーストラにはそれらの供物が献じられる神々が列挙されているが、その中にヴィルーパーアクシャという名の神がいた [Dresden 1941: 162]。仏教では広目天と知られるこの「変形した目を持つ」神は、ルドラ神のひとつの現れであるとされる [Gonda 1980: 350]¹³⁾。この魔的存在性を残しつつルドラ、シヴァの別名となっていたヴィルーパーアクシャに対してヴィシ

11) 魔族の王バリに関しては Meyer [1937] および Hospital [1984] を参照されたい。

12) Bhaviṣya Purāṇa (4.140.53a) = Padma Purāṇa (6.122.50c) = Skanda Purāṇa (2.4.10.44a) madyamāṃsasurālehya-. これら3つの文献は次ぎに続く詩節においてはそれぞれ異なった読みを示す。

13) ボーダーヤナ・グリヒヤーストラ (1.3.36-37) に破壊の女神ニルリテイの息子であるヴィルーパーアクシャに妨げることがないようにと結婚式の冒頭でマントラが唱えられている。同じくボーダーヤナ・グリヒヤーストラ (3.8.2) とボーダーヤナ・グリヒヤシェーシャーストラ (3.15.2-3) はルドラ・ヴィルーパーアクシャを彼の妻、息子、家来 (gapa)、取り巻きとともに招くマントラを伝えている。リグヴィダーナ (1.19ab) はルドラに捧げられた一連のマントラを唱えてヴィルーパーアクシャに帰依すべきと規定する。パーラスカラ・グリヒヤーストラ (3.6.3) では頭痛をもたらし魔物がヴィルーパーアクシャと呼ばれている。このようにグリヒヤーストラ文献に散見されるヴィルーパーアクシャは恐ろしい神ルドラとの親近性を示している。マハーバータにおいてはヴィルーパーアクシャは魔族アスラやラクシャシャの名前として、またシヴァ、ルドラの名前として登場する [Sørensen 1904: 742]。後のプラーナ文献においてはヴィルーパーアクシャはルドラ、シヴァの別名として定着して行った。

ヌダルモータラ・プラーナ (2.104.107ab) は、さまざまな障りを鎮める儀礼でスラーとサウヴィーラカ酒¹⁴⁾を捧げるといふ。

カーリカー・プラーナ (35.21) は春のチャイトラ月の満月の前日にバイラヴァ神を礼拝すべしといい、その際、酒（この場合マドゥとアーサヴァ）、ミルク、果物、肉、魚、血を供物として用いるという。その同じカーリカー・プラーナ (74.204-205ab) で女神は好きな肉や酒などを飲むためにマハーバイラヴァの姿を取るといい、だから、それらを用いてマハーバイラヴァの礼拝を行うべしという。更に、(74.205cd-208ab) で、ブラフマー神とヴィシュヌ神は肉や酒を享受するためにマハーモーハ及びバーラゴーパーラという姿を取るとも語る。カーリカー・プラーナは女神派のタントラ文献の要素を非常に多く持ち、カーリカー・タントラという別名さえ持っている [Rocher 1986: 182]。インドのタントリズムにおいては酒や肉の使用はよく話題になるものである [Gupta, Hoens, Goudriaan 1979: 73; Lorenzen 1972: 3; 88-90]。このカーリカー・プラーナにおけるバイラヴァの礼拝における酒の使用はタントリズムのひとつの特徴と考えられる [Mittra 1881: 403-414]。

魔的な存在やタントリズムにおけるバイラヴァ神への礼拝における酒の使用と並んで、女神の礼拝における酒の使用もよく知られていることである。ハリヴァンシャ (2.22.53cd-54ab、プラーナ版の65.52cd-53ab) およびヴィシュヌ・プラーナ (5.1.84ab) は予言の形で後にドゥルガー女神として知られるようになる女神に言及する中で、その女神は酒や肉によって礼拝されるという [Hazra 1963: 18]。バヴィシュヤ・プラーナ (4.138.98ab) は秋の女神の大祭で酒（スラーとアーサヴァ）のはいった壺で女神を礼拝するという [Hazra 1963: 18; Einoo 1999: 43]。このバヴィシュヤ・プラーナはさらにいくつかの女神崇拝における酒の使用の例を伝える。第4巻61章は、パウシャ月白分9日に行われるドゥヴァジャナヴァミー [Kane 1974b: 324] というドゥルガー女神の礼拝を記述するが、(4.61.48b) でスラーと肉、血で礼拝すべしと説く。それに続く62章は、アーシュヴァユジャ月白分9日から始めて毎月1年間行われるウルカーナヴァミー [Kane 1974b: 277-278] というチャームンダー女神の礼拝を記述するが、(4.62.3d) で肉、魚、スラー、アーサヴァが供物として列挙される¹⁵⁾。さらに、第4巻87章は、毎月白分13日にバラバドラとサルヴァマンガラー女神とハンサを礼拝するアバーダカヴラタを記述するが、(4.87.13ab) で月ご

14) サウヴィーラカは酒を列挙するチャラカサンヒター・総説篇 (27.191) において言及され [矢野 1988: 206]、その作り方はチャラカサンヒター・カルバスターナ (7.72) 及びスシュルタサンヒター・総説篇 (44.33-38) [大地原 1981: 156-157] に詳しく伝えられている。

との礼拝を塗り香と花、マドゥ酒、シードゥ酒¹⁶⁾、スラーとアーサヴァで行い、1年後の祭日にも(4.87.16b)によると花と肉とスラーで礼拝すべしという。

酒を使ったバイラヴァの礼拝を記述するカーリカー・プラーナ60章はいくつかのタイプの秋の女神の大祭を記述するが、武器の礼拝を中心とする儀礼を記述する際に、(60.47ab)で肉、酒(madya)、マドゥ酒を用いてジャガッドウダートゥリー女神を礼拝すべしという。

スカンダ・プラーナ3巻2部17章はシュリーマター女神を称える記述を伝えている。その(3.2.17.7d-8a)でシュリーマター女神の礼拝をスラーなどとさまざまな肉などで行うべしという。

ヒンドゥー寺院を造る際に、寺院の敷地を64の区画に分け、それぞれの区画にさまざまな神々が配置される[小倉 1999: 6-11]。それらの神々が配置された区画の外側の四維に魔的な女神が配される。それらは北東のチャラキー、南東のヴィダーリー、南西のプータナー、北西のパールラクシャシーである[小倉 1999: 8, 10]。マツヤ・プラーナ268章は住居の鎮めの儀礼を記述する。住居の敷地に配されたさまざまな神々に供物が捧げられて行くが、これら四隅にいる魔的な女神にも礼拝が行われ、肉や血などが用いられるとされるが、マツヤ・プラーナ(268.30a)において、北西のパールラクシャシーには魚、肉、スラー、アーサヴァが用いられるという。

このようにプラーナ文献のさまざまな箇所、儀礼における酒の使用が見られる。酒が使用される場合、同じく肉の使用も薦められている。そして、それらによって礼拝される対象は魔的な存在や、恐ろしい神や女神の場合がほとんどである。ニーラマタ(661)はチャイトラ月の満月の日に行われる悪鬼ピシャーチャの礼拝の記述の中で、さまざまな供物の中に並んで肉と飲み物(pāna)に言及する。さらに、ニーラマタ(786-788)はアーシュヴィナ月、白分8日に行われるバドラカーリー女神の礼拝に用いられる供物の中で、(787a)で肉(āmiṣa)に言及し、(788a)で飲み物(pānaka)に言及する[Einoo 1994: 164]。ニーラマタが記述するかつてのカシュミールでは、飲酒の慣行が見られた。この飲み物は少なくともニーラマタにおいてはこの2つの文

15) サウラ・プラーナ(50.26-43)は同様にアーシュヴァユジャ月白分9日から毎月1年間行われるウルカーナヴァミーの記述を伝える。使用されるマントラは同じであるが、供物として酒や肉への言及はない。サウラ・プラーナ(50.50-64)はさらにさまざまな形による女神の崇拝を記述し、(50.71)で女神の信者の心構えを述べるなかで、牝牛やバラモンを敬うこと、みずからの義務を守ること、真実を好むこと、すべての存在者のために思うことなど、バラモン主義の道徳を述べる中で、酒と肉から顔をそむける(madyamāṃsavimukhaḥ)という項目もあげ、酒や肉を許容する人々のグループとは別なグループに属するものによる記述であることを推測させる。

16) Bhāvapraśāsa, saṃdhānavarga 25によるとサトウキビの絞り汁から作られる酒とある。

脈においてのみ登場する。さらに、それにより礼拝される対象が悪鬼ピシャーチャであり、恐ろしい女神パドラカーリーであることを考えると、このpāna, pānakaによって表現される飲み物を酒であると判断してもさしつかえがないように思える。

5. プラーナ文献の儀礼における飲酒の忌避

今まで、決して網羅的ではないが、インドのさまざまな文献に記述される儀礼における酒の使用に関する情報を集めてみた。ここでは、プラーナ文献の儀礼記述で、ときとして、酒を避けるべしと明言される場合があり、それに関する資料を先ず紹介してみる。

ヴィシュヌダルモッタラ・プラーナ 3 巻97–116章は神像安置儀礼を記述する。その冒頭の第97章 ([361b, 17-18]) に、本来の神像安置儀礼が終わった後の7日間に避けるべきものが列挙され、その中に肉と並んで酒 (madya) が登場している。

アーシャーダ月の白分11日にヴィシュヌ神は眠りにつき、4ヶ月後のカールッティカ月白分11日に目覚めるとされる [引田 1997: 273-304]。ほぼ雨季にあたるこの4ヶ月は特別な期間として、いくつかのプラーナ文献で4ヶ月の誓戒 (Cāturmāsyavrata) が記述される。断食や沐浴、ヴィシュヌ神の礼拝などが薦められ、それと同時に、この期間に避けるべきものがいくつか述べられる。ベッドに寝ること、ごまや塩を食べることなどに並んで、酒を飲むべきではないと言われる場合がある。バヴィシユヤ・プラーナ (4.70.23b) とパドマ・プラーナ (6.64.105cd) ではスラーと酒 (madya) が禁じられる。ガルダ・プラーナ (1.121.6a) では酒と肉にスラーが加わる。スカンダ・プラーナ (6.232.14a) ではマドウと肉が併記されるが、蜜をも意味するマドウはここでは酒を意味すると思われる¹⁷⁾。ヴィシュヌダルモッタラ・プラーナ (3.218.4c) はヴィシュヌ神が眠りにつく日から5日間の生活規制を述べ、その中に、完全にマディラー酒を避けるべしという項目がある¹⁸⁾。

秋のカールッティカ月そのものもヴィシュヌ神との関係で宗教的に重要な月で、この月に対する特別な生活規程も記述される。パドマ・プラーナ (4.21.17cd) ではこの期間に避けるものの中に、サウヴィーラカ酒、豆、肉、マドウが列挙される。この場合、すでにサウヴィーラカによって酒が指示されているので、このマドウは蜜で

17) スカンダ・プラーナ (2.2.36) はオリッサ州の現在のブリー市にあるジャガンナート寺院の参詣者に課せられる4ヶ月の誓戒を述べるが、宗教施設の中でのことであるのか、酒や肉には言及されない。

18) マディラー酒はチャラカサンヒター・総説篇 (27.180d) に言及されている [矢野 1988: 205]。

あろうか。スカンダ・プラーナ (2.4.6.47ab) も肉とサウヴィーラカを禁止品に加えている¹⁹⁾。

ナーラダ・プラーナ (1.120.89c) は同様に、ヴィシュヌ神の日とされる毎月の第11日目に避けるべきさまざまなものの中に肉とスラーを挙げている。ヴィシュヌダルモッタラ・プラーナ (1.120.89c) はヴィシュヌ神の信者にとっての正しい行為を記述する中で飲酒 (madyapāna) を避けることによってヴィシュヌは喜ぶと述べ、禁酒を推奨する。

以上はほとんどヴィシュヌ神との関わりをもつ宗教儀礼における飲酒の禁忌のものであった。しかし、デーヴィーバーガヴァタ・プラーナ (11.7.40) とシヴァ・プラーナ (1.25.43) は同一の表現で、シヴァ崇拜にとって重要なルドラアクシャの数珠 [引田 1997: 226-227] をかけているものの生活規制として避けるべきものの冒頭に酒 (madya) と肉を挙げている。シヴァの恐ろしい分身バイラヴァの礼拝において酒は使用されていた。また、シヴァの恐ろしい妃の女神の礼拝においても、酒は供物として用いられていた。儀礼における飲酒の忌避の多くの場合はヴィシュヌ神と関わっていた。しかし、ルドラアクシャの数珠の場合のように、シヴァの宗教との関わりでも、酒に対する忌避が見られる。

このように、いくつかの儀礼的な状況で飲酒の禁止が明言されているということは、そのような状況ではない日常生活において飲酒が容認されていたことを示すものであると判断できるのではないであろうか。

6. むすび

酒に関する情報の収集は「世界の酒に関する共同研究会」の一員になってから意識的に行うようになった。それ以前にもプラーナ文献が記述するさまざまな儀礼を読み、メモをとっていたが、酒に対する意識的な関心が少なかったために、かなりの情報がメモされないままになってしまっているのではないと思われる。したがって、今回紹介した飲酒に関する情報は試掘的な性格しか持っていないのではないかとおそれる。しかし、試掘的な情報であっても、いくつかの傾向を見て取ることができると思われる。

まず、ヴェーダの儀礼において、スラーに代表される酒は深く王族と結びついてい

19) パドマ・プラーナ (6.118.18-23ab) もカールッティカ月に避けるべきものを列挙するが、肉はあっても、酒には言及されない。

たようである。また、結婚儀礼、祖先儀礼、誼をつなぐ儀礼、農耕儀礼においても用いられる場合があった。マーナヴァ・グリヒヤスートラ以降顕著と思われる儀礼に魔的存在を酒や肉で礼拝する場合があった。それに対応するかのように、恐ろしい側面を有する一群の女神の礼拝においても肉や酒が用いられていた。この最後の2つの傾向はシヴァ派とシャークタ派のタントラ文献に受け継がれる、あるいは平行現象として現れていくと思われる。

北インドのビハール州北部の地方をしばしば訪れる機会があった。都市部に住むバラモンの友人が数多くできた。彼等は医師であったり、政府の役人、商人などであるが、かなり多くの友人達がさまざまな機会にウイスキーやジンなどの酒を飲んでいて、しばしば同席させていただいた。しかし、農村部のバラモンの友人達の家に世話になるときは、酒はほとんど話題になることもなかった。しかし、村長の選挙の時、バラモンである私の友人の一人が、やはりバラモンである候補者にウイスキーを薦められたというエピソードを話してくれた。農村部においても、人によってはバラモン達も酒を飲んでいるのかもしれない。国立民族学博物館に勤務していた頃、マドバニ絵画を収集するためマドバニ市の近くの村に滞在したとき、知り合ったバラモンが私をヤシ酒を飲みに誘ってくれた。バスに乗っていると道の両側に最近またかなり多くのヤシ酒を飲む掘立て小屋を目にするようになった。イスラーム教徒の友人も何人かできたが、彼ら達もビールやウイスキーを飲んでいて、いわゆる低カーストの人々の儀礼の歌を録音して集めていた頃、ドームというカーストの上手な歌手と知り合った。彼は歌う前に、マフアーの花から作った透明の蒸留酒をインド風てんぶらと一緒に飲んでいて、彼の歌に感激して、少々謝礼を多くやって、翌日の約束をしたが、行ってみると、彼はそのお金で酔いつぶれ、機会を逸してしまったこともあった。

村に住むバラモン達や、敬虔な宗教心を持つ村人達は、全く酒を飲まないのは確実である。しかし、どの町にも酒を売る店がひっそりとではあるが、存在し、ウイスキーを中心にいろいろな酒を売っている。つまり、酒を飲む人々は確実にいる。ヴェーダの時代から、バラモンに対しては、禁酒の規制がはっきりいわれていて、それを遵守する人々も多くいると思うが、やはり、ヴェーダの時代から、酒を飲む人々もいた。古代インド社会における飲酒に関して詳しく論じたアールトは彼の論文を短い次ぎのような文で締めくくっていた。「酒は飲むべからず、与えるべからず、受け取るべからず (On the whole, as we have seen above, the principle presented in the *smṛti madyam apeyam adeyam agrāhyam*, quoted in our title, remained pure theory)」。この論文をマヌ法典 (5.56) の次ぎの文を引用して結びにかえたい。「肉食に罪はない。酒にも

性の交わりにも「罪は」ない。それらは生き物に自然な活動である。しかし「それの」停止はより大きな果報をもたらす「渡瀬 1991: 169」】。

引用文献

- Aalto, P.
1963 Madyam apeyam. In C. Vogel (ed.) *Commemoration Volume in Honour of J. Nobel*, pp. 17-37.
Bhat, M. S.
1987 *Vedic Tantrism: A Study of Rgvidhāna of Śaunaka with Text and Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass.
Bloomfield, M.
1881 Gr̥hyaparīṣhasaṃgraha. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 35: 533-587.
Caland, W.
1900 *Altindisches Zauberritual: Probe einer Uebersetzung der wichtigsten Theile des Kauṣika Sūtra* (Repn., 1967, Wiesbaden: Dr. Martin Sändig).
1928 *Das Śrautasūtra des Āpastamba: Sechzehntes bis vierundzwanzigstes und einunddreissigstes Buch, Aus dem Sanskrit übersetzt*. (Repn., 1969, Wiesbaden: Dr. Martin Sändig).
Dresden, M. J.
1941 *Mānavagṛhyasūtra: A Vedic manual of domestic rites, Translation, Commentary and Preface*. Groningen, Batavia: J. B. Wolter's Uitgevers = Maatschappij.
永ノ尾信悟
1989 「ブラーフマナ文献に見られる思考法」岩波講座・東洋思想第七巻『インド思想3』岩波書店。
1994 Analysis of the ritual structure in the Nīlamata. In Y. Ikari (ed.) *A Study of the Nīlamata-Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University.
1995 「古代インドの酒スラー」山本紀夫・吉田集而編著『酒づくりの民族誌』pp. 203-216。
1999 The autumn goddess festival: Described in the Purāṇas. In M. Tanaka and M. Tachikawa (eds.) *Living with Śakti: Gender, Sexuality and Religion in South Asia = Senri Ethnological Studies* 50, pp. 33-70. Osaka: National Museum of Ethnology.
榎本文雄
1993 「罽賓ーインド仏教の一中心地の所在」塚本啓祥教授還暦記念論文集『知の邂逅ー仏教と科学』佼成出版社, pp. 259-269。
Gampert, W.
1939 *Die Sühnezeremonien in der altindischen Rechtsliteratur*. Prag: Orientalisches Institut.
Gode, P. K.
1960 *Studies in Indian cultural history*=P. K. Gode Studies, Vol. V, Poona: Prof. P. K. Gode Collected Works Publication Committee.
Gonda, J.
1980 *Vedic Ritual*. Leiden-Köln: E. J. Brill.
Gupta, S., D. K. Hoens, and T. Goudriaan
1979 *Hindu Tantrism*. Leiden/Köln: E. J. Brill.
Hazra, R. C.
1963 *Studies in the Upapurāṇas*, Vol. II (Śākta and non-sectarin Upapurāṇas). Calcutta: Sanskrit College.
引田弘道
1997 『ヒンドウータントリズムの研究』山喜房佛書林。
Hillebrandt, A.
1897 *Ritual-Litteratur. Vedische Opfer und Zauber*. Straßburg: Karl J. Trübner.
1927 *Vedische Mythologie*, Breslau: M. & H. Marcus (Repn., 1965, Hildesheim: Goerg Olms Verlagsbuchhandlung).

- Hopkins, E. W.
1889 *The Social and military position of the ruling caste in ancient India*. (Repn., 1972, Varanasi: Bharat-Bharati).
- Hospital, C.
1984 *The rigious demon: A study of Bali*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- 井狩弥介・渡瀬信之
2002 『ヤージュニャヴァルキヤ法典』東洋文庫, 平凡社。
- Jain, J. C.
1947 *Life in ancient India as depicted in the Jain canons*. Bombay: New Book Company.
- Jolly, J.
1880 *The Institutes of Vishnu*. (Repn., 1965, Delhi: Motilal Banarsidass).
- 上村勝彦
2002 『マハーバーラタ』原典訳1。ちくま学芸文庫, 筑摩書房。
1984 『カウティリヤ実利論: 古代インドの帝王学 (上・下)』岩波文庫, 岩波書店。
- Kane, P. V.
1946 *History of Dharmaśāstra, Vol. III*, First Edition. Poona, Bhandarkar Oriental Research Institute.
1973 *History of Dharmaśāstra, Vol. IV*, Second Edition. Poona, Bhandarkar Oriental Research Institute.
1974a *History of Dharmaśāstra, Vol. II, Part II*, Second Edition. Poona, Bhandarkar Oriental Research Institute.
1974b *History of Dharmaśāstra, Vol. V, Part I*, Second Edition. Poona, Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Keith, A. B.
1920 *Rigveda Brahmanas: The Aitareya and Kauṣītaki Brāhmaṇas of the Rigveda Translated from the Original Sanskrit*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kolhatkar, M. Bh.
1999 *Surā: The liquor and the Vedic sacrifice*, New Delhi: D. K. Printworld.
- Lorenzen, D. N.
1972 *The Kāpālikas and Kālamukhas: Two lost śaivite sects*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Macdonell, A. A. and A. B. Keith
1912 *Vedic Index of Names and Subjects*. (Repn., 1958, Delhi: Motilal Banarsidass).
- Meyer, J. J.
1937 *Trilogie altindischer Mächte und Feste der Vegetation, Zweites Stück: Bali: Gott Saturnus, sein Fest und Allerseelen in Indien*. Zürich: Max Niehans Verlag.
- Mitra, Rajendralal
1881 *Indo-Aryans: Contributions towards the elucidation of their ancient and mediaeval history*, Vol.I. London: Edward Stanford, Calcutta: W. Newman & Co.
- 小倉 泰
1999 『インド世界の空間構造ーヒンドゥー寺院のシンボリズム』東京大学東洋文化研究所。
- 大地原誠玄
1971 『スシュルタ本集』臨川書店。
- Oldenberg, H.
1886 *The Grihya-Sūtras: Rules of Vedic Domestic Ceremonies. Part I*. (Repn., 1964, Delhi: Motilal Banarsidass).
- Rocher, L.
1986 *Tha Purāṇas*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Sørensen, S.
1904 *An index to the names in the Mahābhārata*. (Repn. 1963, Delhi: Motilal Banarsidass).
- 杉本卓州
1984 「飲酒戒考」『金沢大学文学部論集、行動科学篇』5: 77-93。
- 渡瀬信之
1991 『マヌ法典』中公文庫, 中央公論社。
- Weber, A.
1868 Zur Kenntniss des vedischen Opferituals. *Indische Studien* 10: 321-396.

永ノ尾 古代インドの儀礼における酒の使用

矢野道雄

1988 『インド医学概論』科学の名著第Ⅱ期〈1〉, 朝日出版社。

矢野道雄・杉田瑞枝

1995 『占術大集成 1・2』東洋文庫, 平凡社。